

蘭越町総務課職員渡辺・坂野・今野との面談記録

面談日：2023(R5)年10月3日

面談場所：蘭越町庁舎3階会議室

[野村]

J R T に関しては、何の記録も残してない。しかも、開けてみると、契約書を、転売特約も、何もないよ。事業をちゃんと行わせるための縛りは、何一つないよ。「転売してください」と言わんばかりだよ、呆れるよ。

これ僕が言ってるのは、状況証拠としては、少なくとも背任が認められて当然な、状況証拠があるから、ぼくは言ってるんですよ。状況証拠としては。何でそこまで融通を図るのか。一般論として、一般論としてはね、贈収賄ですよ。

贈収賄なんか出ませんよ、100 件に 1 件も出ませんよ、密室の犯罪だから。でも誰が見ても、状況証拠としては、十分に不正をうかがわせるものがある。僕は、それを証拠とするために膨大な時間をかけたよ。膨大な時間を。

あなた方が「ない」「ない」「ない」と言われたら、しょうがないよ。強制力がないから、僕には。でも、今回、やってる内容について、あなた方は確実に、雑談ではない面談があることがはっきりとしていながら、それを不存在とすることに対して、僕は文句言ってるわけですよ。それに対して「副町長の説明が、必要だ」と、こういう話を僕はしましたよね？

あなたが答えられずに「確かにそうだ」と、「じゃあ、副町長を同席しましょう」って言葉を「手配しましょう」って言葉を吐いてる。記録に残ってるよ。それなのに、あなたは、それを完全になかったものとして、弁護士を盾にして、主語が曖昧に、弁護士が「適当ではない」みたいに濁した言い方で、180 度、転換したでしょう。

[坂野]

私が「同席させる」とは言ってないですし・・・

[野村]

違う。同席を求めたことに「同意した」という言葉を僕は使った。「あなたが主体と

なって（同席させると言った）」なんて一言も言ってない。

[坂野]

野村さんが言ってる話は分かりますよ。「説明を聞きたいから、同席して欲しい」ってことですよね？それは分かりますよ。

[野村]

いや、今のことなんかどうでもいいんです。そのときに、あなたは同意したんですよ。

[坂野]

同意したから何だって言うんですか？

[野村]

同意したにも関わらず、そこまでの話が全くなかったものとして、主語が曖昧な言葉で、副町長を同席させないことを頑張ったでしょう？

[坂野]

頑張った・・・

[野村]

あきれるよ。あきれる。いつもそうだよ。あなたも。

[坂野]

あきれてもいいですけど、弁護士が、係争中の・・・

[野村]

ちょっと待ってね。こういうことを話してね。ここまでは電話で言った話ですよ。ここは、僕が言ってる言葉を繰り返します。読み上げますね。僕がいま話をしてるのは、過去の話なんで。過去の話、僕は気持ちが悪いから、いつもそうだよ、あなた方は「記録がないから」と言って、今までのことをなかったものとして。違う弁論を始めるんだよ。で、あなた方が、これ、その時の話です。

（野村）あなた方が言ってるのは「雑談を記録しない」と。「本人が雑談だと思った場合は記録しない」と。あなた方が雑談と言われれば、それが雑談でないことを立証することは不可能なんで、あなた方が雑談と言え、ひっくり返すことはできません

よ。でもね、公募で決まって、契約に至るまで、1 回も記録がないっていうのは、おかしいでしょう？一つもないというのは。全部、雑談で決めたことになるんですよ。全部、雑談で。これ説明してくれよ。

（坂野）ちょっと、そしたら、今回のときにお話し・・・

（野村）副町長と町長が入ってもらえないと困る、あなたのやってることはおかしい。この説明については、町長と副町長がちゃんと入って、説明してもらわないと困る

（坂野）じゃあ、ちょっと日程を合わせて・・・

（野村）はい、お願いします。お願いします。出てこないと困ります。本当にあなただって説明できないでしょう？

（坂野）そうですね

（野村）お願いします

（坂野）ええ

これ僕が同意したと認めて、当然の内容じゃないですか？

[坂野]

話は分かりました・・・

[野村]

違う。そんな言葉をすり返るな。僕が主体となってる言葉を聞いているでしょ？僕が、あなたに対して求めて、それをあなたが同意したと理解して当然のやり取りじゃないですか？

[渡辺]

だから、話は分かったんでしょ？その同意したっていうのは・・・

[坂野]

同意・・・私が出るんだったら・・・

[野村]

違う、僕が聞いているのは。あなたがどう思ってるかなんて、僕は立証しようがないんですよ。僕が求めているのは、僕が、主語は私、私があなたに対して、「あなたが同

意したという風に理解して当然じゃないですか？」ということを僕は聞いてるんです。

[坂野]

まあ・・・あのう・・・町長・・・

[野村]

僕の主語で言ってください。「あなた方が」じゃなくて。「自分は」じゃなくて。それは、相手がそのように受け取られて、しょうがないやり取りじゃないですか？

[坂野]

いや、私が同席させる・・・

[野村]

イエス・オア・ノーで答えられる質問です。ノーだったら説明してくれよ、その理由を。

[坂野]

私が同席させるのは・・・

[野村]

イエス・オア・ノー。ノーでしょう。あなたは。

これは、僕が「あなたが同意した」と理解して当たり前のやり取りですよ？イエス・オア・ノーで聞いてるんです。どっちなんですか？違うんでしょう。

[坂野]

いや、私は・・・

[野村]

違う、イエスかノーかで聞いてるんです。

[坂野]

いや・・・

[野村]

役人だよ、あなたも。小役人だよ。典型的な。

[坂野]

それはいいんですけど、今日は何を・・・

[野村]

だから、さっき言ったでしょ？「少しぐらい付き合いなさい」と。

[坂野]

(笑)

[野村]

だから質問に答えてくれよ。イエスノ・オア・ノーで答えられる質問に。

[坂野]

私の・・・

[野村]

イエスノ・オア・ノーで答えられる質問に答えてくれよ。

[坂野]

野村さんだって、いっぱい喋ってる、こっちだって説明させてください。

[野村]

だから順番というものがあるでしょう？最初に僕の質問に答えてくれよ。

[坂野]

もう1回いいですか？

[野村]

この内容を聞いて、僕は、「町長・副町長に同席してくれ」ということを強く頼んで、あなたそれに何の反応もなしに、「分かりました」「分かりました」と言ってる内容が記録されてるよ。これをもって、僕が「坂野さんが僕の町長と副町長に同席して欲しいということに、同意してくれた」という風に理解するのは、理解したと受け取るのは、当然じゃないですか？そうでしょう？そのことを聞いてるんですよ。

であるなら、なんで、この後に、180度転換するんですか？

[坂野]

メールにも書いてますし、説明をしたと思う・・・

[野村]

してないよ。あなたが何を認めようとしらないから、しょうがなく、僕はこれを書き起こして、書き起こして、仕方なく、2時間もかけて。

[坂野]

電話のときですよ。

[野村]

電話のときですよ。

[坂野]

その後の話です。

[野村]

電話しかしてないでしょう。

[坂野]

その後メールで話したじゃないですか？

[野村]

電話というか、メールの中でね・・・

[坂野]

その説明、いっさい省いて、このときこう言ったからって言われても・・・

[野村]

あのね、僕が言ってるのは、ここまで、ちゃんと経緯が、あなたが今、認めてる通りのねことがありながら、僕がそういうふうに思って当たり前のやり取りをしていながら、180度変わって、あたかも、今まで、その前回までの対応がなかったかのように、断りを続けられる、俺話違うじゃないかと、僕が思ってしょうがないから、僕は記録を書き起こして、2時間もかけて。何度も言いますが、同じこといっぱいやってるから、あなた方が認めないから、何一つ。何一つ、都合の悪いことを。町長や副町長だけじゃないよ。

あんた方だってそうだよ。呆れるよ、僕は。しょうがないから、2時間かけて、書き

起こしたんですよ。それに対して、「確かに、そういうことがあった」と、「自分の言ってることは、確かに違っていると受け取られてもしようがないかもしれないな」と思いませんでしたか？

[坂野]

出られない理由は説明した通りです。

[野村]

そこで言葉が完全に変わってる。その前の段階で、僕が町長と副町長が必要な理由を説明して、あなたが同意したものに対して、あなたが持ち出したのは、主語が不透明な「弁護士がホニャララ言ってる」という全く別次元の話を持ち出して、一生懸命断ってるよ。そこで僕は、あなたにも立場があるでしょうから、我慢して、それを見過ごそうとしたんですよ、あなたの真意を・・・あなたが・・・上から言われて・・・どういう言われ方をしてやってるかどうか、僕には分かる知る術がないから。それは追求することなく、あなたも立場があるから、あなたを突ついてもしょうがないから、「そういうことにしといてやるか」と。でもね、あなたが窓口となって、180度転換したことにに対して、「詫びの一つぐらいあってもいいんじゃないのかな」と思いながらね、僕は、あなたの立場を尊重したやり取りに切り換えてますよ。弁護士、弁護士って言い張るから。それに対して、さっきも言ってる通りね。年に時間もかけて。今野さん、いつも、「自分は関係ねえな」と言わんばかりの仕草をするのは止めてもらえませんか？気分悪いよ。

[今野]

すみません。

[坂野]

同席を求めたのは、野村さんです。

[野村]

そう。

[坂野]

早く、閲覧・・・

[野村]

一番最初に言ったでしょ？今野さんに対して、僕は言いたいことがいっぱいあるよ。言わないけどね。いっぱいある。あなたに対して。分かるでしょう？少しぐらい我慢したらどうだよ。

[今野]

言ってください。いっぱい（不明）

[野村]

いいんですか？じゃ、この後、聞きますよ。たっぷり時間もらって。

（数秒の間）

そんときに、あなたが一言「ああ、確かにそうですね・そういうこと言いましたね。すいませんでした」の一言でもあれば、僕はこんなこと言わないさ。一言でもあれば。何一つなしに、自分がしでかしたことにに対して、180度、変えて、この弁護士について、僕は、いっぱいあるよ、あなたに言ったことに正当性のないことを、いっくらでも言えるよ、あなたが同意するしないはさておき。それも我慢して、とりあえず、あなたの言ってることを、矛先を収めたんですよ、そんときに。あなたは直接判断してる立場じゃないから、しょうがないけどね。

あなたがしでかしたこともあるわけですよ、180度変えたことを、僕に、伝えてること。

（ぼくが）「前はこういったのに、今回違うじゃないか」と、（あなたが）確かにちょっと違うと思ったら、「いや確かにそうでしたと、前回そういうことありましたね。すいませんでした」と一言あってもいいんじゃないですか。

[坂野]

野村さんから言われて、「私は野村さんの言いたいことは分かった」と、で、町長副町長に聞いてみます。それで聞いたところ、「弁護士の方に話をちょっと聞いてみてくれ」と言われて、電話したところに、弁護士は「係争中の内容が含まれてるので、会うべきではない」という回答を・・・

[野村]

ばくが不審に思ったのは、それはあたかも弁護士がそう言ったかのような、主語を曖昧にした言い方で、あなた、返しましたよね。

[坂野]

曖昧に・・・

[野村]

いや、あれは、わざとやってますよ。僕だってあんな所も小学生レベルの、話ですよ。

[坂野]

そんな「わざと思った」ってのは、野村さんの意見ですよ？

[野村]

いっつもそういう言い方だよ。だから、それについても、文章の中で、はっきりさせようとしたでしょう？あなたが曖昧な言い方をしてるから。

それを僕が決めつけることはできませんよ。あなたの国語力はそうなんでしょう。多分ね。だから、それを僕は、それをはっきりさせるために、誰が、何を言ったのかを明確にさせましたよね？ほいで、最初はあなたが、あたかも弁護士が、弁護士がそう言ってるから、「弁護士が『会うな』と言っているから、会えない」という言い方をした。あなたは最初。あなたの言葉はそうだよ。そう受け取るのは、当たり前文章だよ。

あなたが、「それは野村さんが（あたかも僕の理解力に）不足がある」かのような言い方をしたから、僕は言ってるんですよ。

自分の国語力じゃなくて、相手の理解力に問題があるかのような言い方を、あなたは、今、した。

[坂野]

どこですか？

[野村]

僕が、主語が不透明な弁護士を盾にして、合わないという話、あなたの一番最初の一

言は、主語が不透明で、普通にいけば、弁護士がそう言っていると、受け取られるのが当たり前文章だったんです。だから、僕は、それに対して、主語を明確にするように求めたんです。でも、あなたが言ってるのは、「それは、あなたがそう思っただけでしょ？」と、あたかも僕の理解力に問題があるような、言い方をしましたよね？3分前に。

[坂野]

弁護士に（不明）

[野村]

違う。聞いているのは、あなたの言葉。まるで、僕の理解力に問題があるような言い方をしましたよね？

[坂野]

どの部分ですか？

[野村]

いつもそうだ。あなた方は、いつも。3分前に言ったことをすっとぼけるよ。呆れるよ。

[坂野]

（笑）

[野村]

呆れるよ。本当に。

（録音したデータをサーチしながら再生する音声）

誠意がなかったらいつまでも、議論って終わらないんですよ。僕は、僕にも言ってるのは、あなたが全く誠意がないよ。自分が言ってる言葉に対して、全く責任感がないよ。その場、その場で、逃げれば良いと思ってるよ。だから、こんなことばかり、いつも、これ後でまとめるよ。後でまとめて、あなたが・・・

[渡辺]

主幹の言ってることは、正しいじゃないですか？確認をして、弁護士さんと話しをし

て・・・

[野村]

その話ではない。

いま僕が、引っかかっているのは。この前もそうだよ、町長が。僕が言っているのは、自分を正当化するために、相手を悪者にしてしまうことって、よくあるんです。

自分を正しいと、自分を正当化するために、そりゃそうでしょう。

[坂野]

(不明) 本当に言っていることがわからなくて・・・

[野村]

だから、これ3分前の話なんだよ、待ってくれよ。

(録音したデータをサーチしながら再生する音声)

[坂野音声の再生]

野村さんから言われて、私は野村さんの言うことはわかった町長副町長に聞いてみます。それで聞いたところ、弁護士の方に話をして聞いてみてくれと言われて電話したところ、弁護士は係争中の内容が含まれる・・・そんなわざと思ったというのは、野村さんの意見ですよ。

[野村]

「わざと思ったというのは、野村さんの意見ですよ」と。

[坂野音声の再生]

「弁護士の方に話をして聞いてみてくれ」と言われて電話したところ、弁護士は「係争中の内容が含まれているので、会うべきではない」という回答をいただく

[野村音声の再生]

ぼくが不審に思ったのは、それはあたかも弁護士がそう言ったかのような、主語を曖昧にした言い方、あなた返しましたよね？

[坂野音声の再生]

いや・・・

[野村音声の再生]

あれはわざとやってますよ。僕だって、あんなの小学生レベルの、話ですよ。

[坂野音声の再生]

そんな「わざと思った」というのは、野村さんの意見ですよ？

[野村]

その、あなたはメールの中に書いてる「弁護士が言った」という言葉は、それは弁護士が言ったという風に受けてるのは、僕の理解力によるものであってね。「そうじゃないんだ」と、「そう受け取る人の方が大多数だ」と言わんばかりの言い方。つまり、僕の理解力に、問題の根源を、持ってこようとしてるよ、この言葉で。分かるでしょう？

[坂野]

全く分かんない。

[野村]

もう1回いきます。

[坂野]

いや、いいですよ。わざとっていう言葉に私は・・・

[野村音声の再生]

あれは、わざとやってますよ。僕だってあんな、小学生レベルの話ですよ。

[坂野音声の再生]

そんなわざと思ったというのは、野村さんの意見ですよ？

[野村]

「わざと」は、確かにそう。「わざと」に反応したというのは、確かにあなたの言う通り。でもね、「わざと」っていうのは、実態のない言葉だから、意図があるか、ないかを意味するだけに過ぎなくて、その「わざと」の中には、その本文があるわけですよ。あなたが書いた文章の本体があるわけですよ。僕がわざと書いたのかどうかを、あなたの文章から印象を受けたのは、あなたが、「わざと」そういう使い方をしたと

いう印象を持った、印象を持たせられた、あなたの文章があるわけですよ。あなたの文章が。それが果たして、誰が見ても弁護士が言ってるようにとられるものなのか。それとも、弁護士が言ったものではない、というのが明らかなものなのか、その文章を見ればわかる話ですよ。その文章を見れば、

そこで見て、誰が見ても、弁護士が言ったと取られてしょうがない文章だったら、僕が「わざと」と言うのは、そんなにおかしな話じゃなくて、それ見ましょうよ、読み上げますよ。

これ、まずね、この坂野さんが、わざわざ、今までのやり取りがあったのに、タイトルを変えて、別スレッドにしてしまって、さらにそのタイトルの中で僕が、求めてないのに「面会」という言葉を、持ち出して使ってる。これも、僕がわざとやってるといふ風に、「わざと」という形容詞を使った根拠なんですよ。

なんで、今までのやり取りの中で続けられないのか。ビジネスの中で、毎日100件くるといふ人だって、ざらにいるさ。「どのやり取りだったっけ？」って思い出すために、整理するために、あえてタイトルを変えませんか、基本的に。特別な場合じゃなければ。それをあなた、わざわざ変えて、過去のものなかったものとして、しかも、タイトルの中に、あたかも僕が「面会」を求めてかのような言葉を使ってる。そこに書いてある。

（坂野発言を読み上げ）いつもお世話になってます坂野です。町長、副町長への面会ですが、弁護士に相談したところ、弁護士に相談したところ「係争中に、相手方と会うのは控えるべきとのことでした」。これも明らかに、弁護士が言った、と取られると当たり前ですよ。

これを弁護士が言ったというのは、当たり前と捉えるのが当たり前だから。念のために僕は主語を、はっきりさせようとしてるわけですよ。何でもかと言うと、弁護士が入ってくる要素がないから、ここのことにね。全く係争中のこととは関係のないことに対して、新たな開示請求を求めて、町民が、町に対して、やり取りしてるわけですよ、今の係争とか、全く関係ないことだからね。

ここにね、坂野さん持ち出す理由がないんですよ。弁護士を持ち出す理由がないんですよ。弁護士が言ってるよ。

[坂野]

(不明)

[野村]

J R Tとの対応記録・・・ちょっと待って、僕が、あなた方に（不明）を提示して、やってるのは、あなた方の対応ですからね。今ここでまさにやってるように、あなた方がぬらりくらりと、言ってることを3分後に「言っていない」と言ったり、暴言を吐いたことを「やってない」と言ったり、そういうことを今この場だってやってるんだよ、あなたは。この場でも。呆れるよ、僕は。そういうことをやられたから、仕方なく、妨害をされたから、それに対して損害賠償請求を起こしてるんです。

J R Tは関係ないんです。蚊帳の外なんです。裁判においては。

[坂野]

町の代表者である町長・・・

[坂野]

「副町長でいい」って、言ってるでしょ？

町長の対立があるので、

[渡辺]

だからそれは・・・

[野村]

待って、坂野さんが喋ってるよ。

[坂野]

今日、閲覧、どうしますか？

[野村]

違う。さっき言いかけたこと喋りなよ。

[坂野]

時間とりすぎだと思うんですけども・・・

[野村]

僕はさっき言いましたよね。僕が何百時間失ったと思います？このことで。何百時間。あなた1時間失いました？いま。やっと1時間減っただけでしょ。

しかも、あなたは給料もらえるんだよ。

[坂野]

いや、給料もらってるから、他の人・・・

[野村]

違う。言ってるのは、あなた方がぬらりくらりと、証拠も出さないで、3分、5分前に言った言葉を撤回してしまうことによって、どれだけ僕は、時間を失ったと思うんですか？あなたが全く180度変えてことを言って、それだけに時間を失いましたよ、僕は。それをあなたに認めさせるために。

あなた、たった1時間失っただけで、「もう早くしてくれ」って言うんですか？

[坂野]

会話じゃなくてね、文章でやり取りしませんか？

[野村]

文章っていうのは、いい加減な受け答えがまかり通ってしまうんですよ。いい加減な受け答えが。相手がAのことを聞いているのに、Cのことを答えて、何となく回答しているかのように見えてしまうんですよ。それをリアルタイムで突つけないですよ。いつまでもたっても堂々巡りになるんですよ、誠意がなかったら。議論のルールをちゃんと、双方が、同じ温度で、理解してなかったら、無理なんですよ。

[坂野]

(不明) な気がします・・・

[野村]

あなた方が知らんぷりするからだよ。都合の悪いことをすぐ忘れたぷりするからだよ。今聞かれる言葉は・・・理解できないことを・・・論点を明確にさせないようにすれ

ば、いつまでたっても議論って堂々巡りなんだよ。あなた方に僕はいつも論点を明確にしようとしてるよ。あなた方はいつも論点をずらそうとしてるよ。

あなたが答えようとしてた僕の質問は、弁護士が、あたかも言ったかのように受け取って当たり前であることに対して、あなたは僕の理解力に問題があるかのような言い方をしましたよね？

でも、明らかに、これ弁護士が言った言葉なんですよ、誰が見ても。しかも、括弧書きで括ってあるから。理解力の問題も、クソもないんですよ。

[坂野]

理解力……

[野村]

あなたが言ってるのは「わざと」の話でしょうけどね。でもね、これが「わざと」になるのは、実は弁護士が言った言葉じゃなかったということは、後から事実として確定してから「わざと」になるんですよ。

これ誰が見ても、誰が見ても弁護士が言った……

[坂野]

弁護士が言っていないっていうのは、何を見て……

[野村]

弁護士は言っていない……

[坂野]

弁護士が言った（不明）

[野村]

あのね、町長の面会を、弁護士に相談したところ……ああ、確かにそうですね。

[坂野]

閲覧どうしますか？

[野村]

はい。閲覧ですよ。

[坂野]

今日、閲覧しに来たんですよね？

[野村]

そうです。

[坂野]

始めます。

[野村]

ちょっと待って。

[坂野]

もう20分もないですけど。

[野村]

あなた、12時になったら、きっかりで締めるつもりでいるんですか。

[坂野]

午後から予定ありますので。

[坂野]

お昼、12時にアポイントがあるんですか？

[坂野]

12時はないです。

[野村]

ないでしょう。よくある話じゃないんですか。お昼にずれ込んでしまうって。僕は、あなた方が、まともな受け答えをしてくれれば、こんな時間取りませんよ。僕だって忙しいんだから。

[渡辺]

(不明)

[野村]

何度も言ってる通り、僕が言ってるのは、「なんで、こんなこと一つも謝れないの？」

と。

[坂野]

どこを謝るの？

[野村]

2時間もかけさせて、過去にやり取りをしていることをね。

[坂野]

「（時間を）かけて」なんて言ってないですよ。

[野村]

あなたが認めないから、2時間もかけたんじゃないかよ。

[坂野]

何を認めてないんですか？

[野村]

「過去に同意しましたよね？」って、僕が言ってることに對して、僕が町長と副町長の同席を求めて「それに同意しましたよね？」と言ってることに對して、あなたが何も認めようとしないから、書き起こして、見せてるわけでしょ？

[坂野]

（不明）

[野村]

違う。そこの中に「面会」って言葉があるんです。僕は、「面会」を求めてない。当事者として、説明すべき担当者じゃないですか？それがたまたま町長・副町長であっただけなんです。あなたが分からないから、しょうがないから、町長・副町長が出てこざるを得なくなった経緯が、僕が書き起こした文書にあるでしょう？そのことを言ってるんですよ、それを、あなたは、僕があたかも「面会」を求めているような言葉にしちゃってるんですよ、タイトルを変えて。同席は求めているけども、「面会」を求めたわけじゃない。

[坂野]

(不明)

[野村]

それは文章の中で明らかになりましたよね？文章のやり取りの中で。僕は「面会」を求めてませんよと。

[坂野]

私も文章の中で、会うことだっていう風に・・・

[野村]

それは国語辞典から僕は引っ張りましたよね？「面会」というのは、どちらかという
と、目的が明確じゃなくて、表敬訪問だとか、ただ単に会うこと自体が目的という場
合に、使われるものであると、概ね。ということは、国語辞典にも出てますよ。

[坂野]

それだけじゃないですよ。

[坂野]

いやそれだけじゃないけどもね、言葉っていうのはグレーゾーンがあるから。でも、
多くの人が最初に「面会」という言葉で使うのは、病院での面会、収監者への面会、
ただ会うこと自体が目的の場合に使うものですよ、多くの場合は。でも、僕の場合は
全く違いますよ。

こういうところだよ、あなたのずるいところは。ずるいところは、そういうところだ
よ。「面会」という言葉は、「面会」という言葉でね、言葉っていうのは限定された
ものじゃないさ。グレーゾーンがあるけどもね。

[渡辺]

(不明)

[野村]

ちょっと待ってくれよ。言ってるのは、「面会」という言葉はね、病院の面会、収監
者への弁護士の面会、オリンピックの金メダリストが・・・面会と言わないけ
ど・・・面会っていうのは、そういう表敬的な場合に多く使われるんじゃないです

か？イエス・オア・ノー。

[渡辺]

いや、「面会」っていうのは・・・

[野村]

いやいや、あなたはノーと言うんですね。渡辺さんは、「面会」という言葉が、僕が国語辞典で見る限りは、目的よりも、会うこと自体が目的である場合に多く使われるということが書いてありましたよ。あなたは否定するわけですね？それを否定すると。分かりました。それで結構です。渡辺さんの意見は分かりましたと、僕が調べる内容と、僕が使ってる言葉、多くの人が使ってるだろうという言葉の定義とちょっと違うみたいですけどね。そういう人もいるってことは理解しましたよ。

[坂野]

閲覧、どうしますか？

[野村]

僕が怒ってるのは、あなた方が「面会」という言葉を使って、あたかも弁護士が、言ってる言葉に、あなたがすり替えようとしたことに対して、著しく不快感を感じているということだけ言っておきますよ。

あなた方は、最後は謝らないさ。いつまでたっても、謝らないから諦めます。蘭越町の職員と話をしてると、いっつもそうだよ。もうこれはここまでにします。じゃあ、次にしましょう。文章ね。